

氏 名：藤 澤 和歌子
学 位 の 種 類：博士（看護学）
報 告 番 号：甲第114号
学 位 記 番 号：博第111号
学位授与年月日：令和5年3月15日
学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当
論 文 題 目：レシピエントとともに暮らす腎移植ドナーの経験
Experiences of Kidney Transplant Donors Living With Their Recipients
論 文 審 査 員：主査 本 庄 恵 子
副査 川 原 由佳里（正研究指導教員）
副査 三 浦 英 恵（副研究指導教員）
副査 遠 藤 公 久
副査 榊 原 哲 也

論文審査の結果の要旨

審査の概要

日本における臓器移植はほとんどが近親者からの生体臓器移植であり、腎移植で85%以上を占める。生体臓器移植は倫理的問題を含んでいるために、ドナーの決定は本人の自発的意思を前提とするが、近親者であるほどドナーにならないという選択は難しい。本研究では、レシピエントとともに暮らすドナーに焦点をあてて、術前から術後6か月におけるドナー8名の腎提供の経験が明らかにされた。

結果では、密な家族関係のなかで行われる臓器移植の複雑な様相が描かれている。ドナーは一緒に暮らすレシピエントの大変さを身近に感じ、自身が腎提供しなかった場合のつらい結末を予見し、透析や食事制限などの生活上のストレスや、それらを抱えて生きる将来や老後に不安をもっていた。臓器移植というあまり知られていない医療をめぐり、周囲から思いがけない反応や批判を受けながらも、それまでのレシピエントとの関係、今回の移植のために乗り越えた困難をふまえ、腎提供に自分なりの意味を見いだし、期待をもって意思決定をしていた。そして術後には腎提供をしてよかったのかを、レシピエントと自身の健康状態にも影響を受けながら評価をし、術前の意味づけを強めたり、反対に喪失感や寂然としない思いを抱いたりしていた。また回復してからもレシピエントの移植腎がいつまでもつかや、自身の健康に不安をもつ者もいて、それらは今後も続いていくものと考えられた。

審査では、本研究が、多様な生活背景や家族関係を有するドナーの参加が得られ、豊富なバリエーションが示されている点、インタビューを通してドナーが術前術後にかけて体験した様々な出来事やそれについての思いを十分に引き出すことができている点、また腎提供に迷い、踏み切る場合においても、周囲の言葉に揺らいだり、その経験に影を落としたりするなど、ドナーの経験を精緻に描きだしている点で評価された。研究者自身が移植医療に携わった経験をもとに、術前術後にあるドナーの状況に配慮して、丁寧に関係を築き、研究を進めたことが結果につながったといえる。

研究を通じて、生体臓器移植について十分に知られていない現状において、ドナーの意思決定を支援する必要性、移植後も、移植による解決は一時的で、将来腎臓の機能が廃絶することも含め、家族として人生や老いを受け容れていくプロセスを支援する必要性が示唆されている。本研究は、生体臓器移植がもたらす様々な影響を理解し、支援を検討するのに役立つと考えられる。また高齢社会にある日本において、生体腎移植が老後に不安を抱える夫婦にとっての一つの選択肢となりつつある現状をふまえ、本研究がこの分野における議論を活発化することも期待できる。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。